



〈雑録〉ゾムバルトノ觀タルマークス(2)

小西, 虎雄

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 9(4):663*-681

(Issue Date)

1910-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051632>



グムバルトノ觀タル
マークス (其二)

小西虎雄

第二節 資本制發展論

マークストエンゲルストガ其偉大ナル進化ノ理論ヲ構成スル前掲以外ノ部分ヲ作リ上グルノニハ前程巧ミデハナカツタ。以下順次ニ研究シテ見タイト思フ。

(II) 集積論 *Akkumulationstheorie* ノ主張ノ主要點ハ大資本家ノ數ハ絶エズ減少スルト云フ

ニアルガ、之ハ明ニ誤デアル事ガ證明セラレル
 ノデ、寧ロ絶エズ増加スルト云フ方ガ當ツテ居
 ル、其證據ニ拙著「十九世紀ニ於ケル獨逸國民經
 濟」ニアル數字ヲ引用シテ見ルト、一年ノ所得高
 一萬馬克ノ所ニ境界線ヲ引イテ見テモ、或ハ二
 萬馬克、五萬馬克、若クハ十萬馬克、任意ニ何處
 ニ境界線ヲ引イテ見テモ其結果ハ何時デモ之ダ
 ケノ所得アル人ノ數ガ、之ヨリモ所得ノ少イ人
 ノ數ニ比シテ速ニ増加シテ居ル事ヲ發見スル。
 シカモ其人數ハ彼等全體ノ所得高ノ増加ト凡ソ
 同様ノ比例デ増加シテルカラ、各人ノ平均ノ富
 力ハ常ニ前ト同ジデアル。此ノ證明ニ富裕ナ漢
 堡ノ盛ニナツタ期間タル一八九五―一九九年ヲ取
 ヲテ見ルト、一萬馬克乃至二萬五千馬克ノ所得
 者ガ一八九五年ニハ三千四百四十三人デアツタ
 ガ一八九九年ニハ既ニ四千八十二人トナツテ居
 リ、其總所得額ハ一八九五年ニハ五千三百五十
 萬馬克、一八九九年ニハ六千三百十萬馬克デア

ルカラ、平均ノ所得ガ前ニハ一萬五千八百五十
 三馬克、後ニハ一萬五千七百五十馬克デア
 ル。二萬五千馬克乃至五萬馬克ノ所得者ハ千〇五十
 四人カラ千三百二十二人ニ増シ、其總所得額モ
 三千六百九十萬馬克カラ四千六百萬馬克ニ登ッ
 テルカラ、平均一人ノ所得額ガ前ニハ三萬五千
 九百八十七馬克デア後ニハ三萬五千三百八十四馬
 克デア
 ル。五萬馬克乃至十萬馬克ノ所得ハ一八
 九五年ニ四百八十四人三千三百十萬馬克、一八
 九九年ニハ五百八十五人四千〇四十萬馬克デア
 ルカラ、平均所得ハ前ニハ六萬八千三百九十馬
 克デア後ニハ六萬九千〇六十馬克デア
 ル。最後ニ
 十萬馬克以上ノ所得者ノ數ハ二百五十人カラ三
 百十一人ニフエ、其平均年收ハ二十一萬馬克カ
 ラ二十一萬九千六百四十六馬克ニフエタ。更ニ
 伯林ノ富豪ヲ取ツテ見ルト、伯林全市ニ三百萬
 馬克以上ノ財產家ハ一八五四年ニハ六人シカナ
 カツタガ、一九〇〇年ニハ六百三十九人ニナツ

タシ、百五十萬馬克ノ富豪ハ二十三人カラ一三
二三人ニ昇ツテ居ル。之ニ依テ見レバ大資本家
ノ數ガ絶エズ減ツテ行クト云フノハ常ニ誤謬デ
アル。統計ノ數字ヲ如何様ニヒネクリ廻シテ見
テモ、結果ハ常ニ同ジデアル。シテ見ルト、所
謂『資本制經濟組織崩壞』ノ利那ニ近ヅク程『他
人ノ富ヲ奪フモノ』ノ數ガ(減少スベキ筈デアル
ノニ事實ハ之ト正反對ニ)益々増加シツ、アル
ノデアル。又ソレ丈ケ他人ノ富ヲ奪ツテ獨リ榮
エルト云フ事業ガ益々困難トナル譯デハナイ
カ。

(四)貧窮論 Verelendungstheorie ニョルト資
本制經濟ノ内部ニ於ケル無產者階級ノ地位ハ、
精神上ヨリ見テモ物質上ヨリ見テモ改善スルト
云フ事ハナク。絶エズ改惡スル傾向ガアルト云
フノデアルガ、マークストエンゲルストガ主張
シタト同様ニ之ヲ主張スルモノハ今日純「マー
キシスト」ノ中ニモナイ。少クトモ、賃銀勞働

者ノ地位即チ彼等ノ生活程度ヲ眼中ニ置イテ判
斷スレバ、之ハ事實ト餘リニ明白ニ矛盾セル議
論デアル。無產者階級ガ「如何程抑壓セラレ束
縛セラレ、迫害セラレ」テ居ルカ、又其程度ハ殖
エテ行クカ減ツテ行クカト云フ事ヲ確メルノハ
甚ダ困難デアル。何故カト云ヘバ之ハ結局個々
ノ觀察者及判定者主觀の判斷ニ依テ決スル外ハ
ナイカラデアル。私一個ノ判斷デハ、精神の方
面ヨリ見レバ貧窮論ガ當ツテ居ルト云フテモ差
支ナシト考ヘル。殊ニ勞働者ノ智識道德ガ進ム
程彼等ハ「抑壓」「束縛」「迫害」(此等ハ凡テ純精
神的、內心的ノモノデアル)ノ類ヲ痛切ニ感ズル
ニ至ルデアラウカラ、カウツキーノ如ク、マー
クスノ貧窮論ヲ此様な心理的主觀的ナ意味ニ解
釋シテ之ヲ維持シヤウト試ムルナラバ、之ニ對
シテハ多ク異論ノ挿ム可キモノハナイ。然シマ
ークスエンゲルス自身カラ云ヘバ彼等ガ其敎理
ニ或ル他ノ實際的ナ意義ヲ與ヘテ居ツタ事ハ明

デアル。カノ資本論ノ名高イ一節ニ貧窮ノ程度墮落ノ程度ハ益々増加スルト主張シテアルノヲ見テモ、又共產黨宣言ノ中ノ言葉ニ徴シテモ、彼等ガ貧窮ノ程度ハ増長スルトシタ主張ニ極メテ明カナ實際的ナ思想ヲ結ビ付ケタコトハ寸毫ダモ疑ガナイ。即チ『近代の勞働者ハ工業ノ進歩ニ伴フテ向上シテ行ク代リニ愈々深ク其階級獨特ノ條件ノ下ニ沈淪シテ行ク。勞働者ハ窮民トナリ、貧窮ノ程度ハ人口ヤ富力ヨリモ一層早イ速度デ以テ増進スル』ト云フノデアルガ、之ハ明々白々誤謬デアル。

勞働者ノ地位ハ資本制發展ニ伴ツテ向上シタ恐ラク其向上ノ速度ハ上層階級ヨリモ緩カデアツタカトモ思ハレルノデアルガ、其向上シタト云フノハ事實デアル。之ハ近時公ケニセラル、幾多ノ研究ノ皆承認スル所デ、縱令浮薄ナ時流ヲ追フ著述家ハ之ヲ認メナイトシテモ、信用ヲ置クニ足ル著述家、皮相ヲ棄テ、事物ノ相眞ヲ

看破スル著述家ハ皆之ヲ認メテ居ルノデアル。先ヅ佛蘭西ノ勞働局ノ調査ニ依ルト、同國ノ勞働賃銀ハ一八五〇年來二倍シタ。即チ婦人勞働者デハ一法〇二參カラ二法二〇參ニ、男子勞働者デハ二法七參カラ四法ニ登ツタ。然ルニ其間ニ生活費ハ決シテ四分ノ一以上登リハシナカツタ。

社會主義者デアルシドニイウエツブガ一八三七年カラ一八九七年ニ至ル英國勞働者ノ進歩ニ關スル意見ニヨルト、其間ニ貨幣賃銀ハ二倍シタガ、生活品ノ價ハ魚肉ト牛乳トノ外ハ一八九七年ニ於テ一八三七年ヨリモ概シテ安イ。唯家賃ハ高クナツタガ『其高騰モ熟練勞働者ノ賃銀ガ騰貴シタノニハ及バナイ。而テ毎週ノ賃銀ハ勞働者ト其家族ヲシテ確ニ其祖父ヨリモ遙ニ多ク愉快ナル生活ヲ送り文明ノ惠ニ浴スルコトヲ得セシメテ居ル』ウエツブハ又英國デ窮民ノ數ガ一八三七年ヨリモ一八九七年ニ多イ、即チ絶

對數カラ云ヘバ増シタガ、全人口ニ比例シテ見レバ却ツテ減ツテ居ルト考ヘテ居ル。英國ニハ一般のノ所得統計ナルモノガナイカラ、(ウエツプハチャールス、ブースノ推算ニ據テ其意見ヲ立テタ)ウエツプハ之ヲ證明スルコトガ出來ナカツタケレドモ、蓋シ然ウデアラウト思ハレル。獨逸ニ於テモ此關係ハ餘リ違ハナイ。勞働者ノ大部分ガ五十年又ハ百年以前ヨリハ多量ノ財ヲ消費シテ遙カニ好イ生活ヲ送ツテ居ルコトハ疑ガナイ。又貧民及ビ最貧民ト云フ可キ者ノ絶對數ガ増シテ來ルカ減ツテ來ルカハ誰モ確ニハ斷言スルコトガ出來ヌノデアルガ、少クトモ最近十年間ニ全人口ニ對スル其比率ガ減少シタ事モ疑ナキ事實デアル。例ハサクセン王國デ一年五百馬克以下ノ所得シカナイ人間ハ一八七九年ニハ全人口ノ五割一分五厘一毛デアツタガ、一八九四年ニハ三割六分五厘九毛トナリ、一九〇〇年ニハ二割八步二厘九毛ト減ジテシマツタ。

又普魯西デハ五百馬克以下ノ所得ノ人間ガ一八九二年ニハ全人口ノ七割〇二厘七毛デアツタガ一九〇〇年ニハ六割二分四厘一毛トナリ、一九〇六年ニハ五割六分二厘トナツタ。更ニ詳細ノ數字ガ必要ナラバ拙著『十九世紀ニ於ケル獨逸國民經濟』ト『近世資本制度論』トニ就テ見ラレタイ。

貧窮ノ程度ハ人口數及ビ富力ヨリモ速ニ増加スルト云フ假定ノ誤デアル事亦確デアル。マークスガ目シテ以テ資本制ノ最モ發達シタ國ダトシタ英蘭、又マークスガ最モ重キヲ置イタ英蘭其英蘭デ從來ヨリモ完全ニナツタ救貧制度アルニ拘ラズ、貧民ノ數ハ過去數十年間ニ絶對數ニ於テモ減少シタ。即チ一八七一—七五年間ノ平均九一八、九六六人カラ一八九一—九五年間ノ七八七、一四四人トナツタ。之ニ伴レテ總人口ニ對スル貧民ノ歩合モ三分九厘三毛カラ二分六厘五毛ニ降ツタ。最近十年間ニハ英國ノ貧民數

ハ殆ンド變化ガナカツタ結果、全人口ニ對スル割合ハ一八八九—九三年間ノ平均二割六分四厘カラ一九〇〇—〇四年間ノ平均二割四分五厘ニ下ツタ。貧民救助數ハ一八七〇—一九〇〇年ノ間ニ英蘭及ビウエルルスノ全體デハ二割三分、倫敦デハ一割九分五厘最モ貧乏人ノ多イノデ名高イホワイトチャペルデハ六割〇八厘ヲ各減シタ。

扱斯克論ジ來テ殘ルハ

(五)崩壊説 *Zusammenbruchstheorie* ノミトナツタ。之ハ資本制經濟ハ自分デ自分ノ墳墓ヲ掘ツテ居ルト教ヘルノデアアル。商業恐慌ノ益々烈シク起ツテ來ルノハ、現今ノ經濟組織ガ將來永ク其地位ヲ保ツテ居ル能力ガナイ事ヲ示スモノデアアル。恐慌ハ現在ノ市民的社會ニ何回モ繰リ返シテ屢々起ル破産トモ云フベキモノデ、何日カハ其恐慌ノ範圍ガ非常ニ擴ツテ到底回復シ難イモノニナルニ相違ナイト云フノデアアル。私

ハ先ヅ我々ノ今日ノ智識ノ程度デハ此ノ思想ヲ以テ理論上誤謬デアルト云ハザルヲ得ナイ事ヲ述ベテ置ク。マークス説ヲ理論上カラ打破シヤウトシタヅウガン、バラノウスキ—Tugan-Baranowskiノ研究ハ私ヲシテ首肯セシメナイ。其何故ナルカラ論述スルノハ茲デハ餘リ岐路ニ走セルカラ止メテ置クガ、兎ニ角之ガ不充分ナガラマークスノ恐慌論ヲ打破ラウトシテ立テラレタ第一ニシテ又唯一ノ企デアツタノデアアル。私ノ見ル所ヲ以テスレバ、茲ニ其正當ナ事ヲ立證スルコトハ出來ナイガ、—マークスガ之ヲノミ眼中ニ置イタ定期的ノ恐慌ハ決シテ資本制經濟組織必然ノ現象デハ無クシテ時々ノ好景氣ノ時期ニ伴フテ現ハレテ來ル偶然ノ紛亂ニ過ナイ。資本制經濟ノ本質カラ生ジテ來ルモノハ寧ロ一八七〇年代ノ中頃カラ一八八〇年頃迄續イタ様ナ慢性的ナ不景氣ノ狀態デ、之ハ又貴金屬ノ生産ガ今迄ヨリモ穩カナ歩調デ行ハレル様ニナル

ト直ニ止マルモノデアル。此ノ場合ニハマークストエンゲルストガ云フタ様ナ瀕死ノ病ノ徵候ガ現ハレルノデハナイ。資本制經濟ハ其墳墓ヲ掘ルノデハナク、唯病床ニ横ハツテ而モ尙ホ永ク生存スル事ガ出來ル様ナモノデアル。イヤ、今日既ニ實驗上、マークストエンゲルストガ其レ許リヲ考ヘテ居タ恐慌ノ一種即チ好景氣ノ後ニツイテクル不況ノ程度ハ益々激シクナルト云フヨリハ寧ロ追々緩クナルト云フコトハ確カデアル。一八九〇年代ノ中頃カラ其世紀ノ終頃迄ノ好景氣及ビ事業勃興ハ資本制經濟ガ未ダ嘗テ之ニ似タモノニサヘ出會ツタ事ガナイ程盛ナモノデアツタガ、一九〇〇年ニ始マツタ反動ハ(二十五年間ノ後ニ初メテ起ツタモノデアル)從來ノ如何ナルモノト比ベテモ緩徐ナモノデアツタマークストエンゲルストガ一八三六年、一八四七年、一八五七年、一八七三年等ノ恐慌ニ於ケル其經驗ニ基テ記述シタ色々ノ恐ルベキ出來事ノ

中デ一九〇〇年以後ニ現ハレテキタノハ其ノ極微カナ部分ニ過ギナイ。然リ。其微カナルヤ實ニ人ヲシテ這般最近ノ經濟上ノ擾亂ヲ呼ブニ古來慣用シ來ツタ意味ニ於ケル『恐慌』ナル語ヲ以テスベキカラ躊躇セシムル程デアル。此ノ如ク昔恐慌ノ結果トシテ生ジタ様ナ有害ナ狀態ガ今日ノ經濟生活ヲ襲ハヌ様ニシタ原因ハ色々アルガ、其中最モ主ナルモノハ近時銀行組織ノ益々完全ニナツタコト是レデアル。

第三節 科學的社會主義ノ拋棄

マークスノ敎理ノ多クハ最早ヤ科學ト一致シナイ、夫ハ誤謬デアルト云フ考ハ「マーキスト」デアルト同時ニ熱心ナ社會主義者デアツタ人々ノ心中ニ非常ナ暗闘ヲ起サシメザルヲ得ナカツタ。最初彼等ハ其純粹ノ敎理ヲ色々ニ解釋シ直シ、疑ハシイ箇所ヲ巧ニ註釋シテ批評家ノ

聲ヲ沈默セシメヤウト試ミタガ、結局何ノ役ニモ立タナカツタコトハ云フヲ俟タヌ所デ、『マークスハ重要ナ點ニ於テ誤ツテ居ツタ』ト認ムルノ止ムナキニ至ツタ。茲ニ於テ熱心ナ「マーキスト」ハ、サナガラニ自然科學ニ聖書ノ根本思想タル可キモノヲ破壞サレテ了ツタ基督教信者ト同ジ様ナ立場ニ立ツニ至ツタ。「我ハ科學ガ破壞シ去ツタ形式ニ因ハレテ居ル我信仰ヲ抛ツ可キカ、抑又我信仰ヲ救ハンガ爲ニ科學的智識ノ前ニ眼ヲ閉ス可キカ」。是レゾ即チ「マーキスト」ノハタト出會シタ疑問デアツタ。其何レニ決スルトモ其力ノ及ビ難イ等シク六カシイ否定ヲセンケレバナラナカツタ。所ガ科學ニ對スル意識ヲ失ハナイ現代ノ基督教徒ヲ懷疑ノ中カラ救ヒ出シタト同ジ光ガ其蒙ヲ啓イタ。即チ彼等ハ爭フテ今ノ今迄自分等ハ信仰ト智識、世界觀ト科學トヲ餘リニ密接ナラシメ過ギタト云フコトヲ認識スルニ至ラタ。一切ノ信仰ハヨシ神

ニ對スルモノデアツテモ、政治的ノモノデアツテモ科學上ノ眞理ニ其存在ノ正當ナル可キ理由ヲ尋ヌ可キデハナイト云フ事ヲ悟ツタ。言ヲ換エテ云ハバ科學上ノ理論ヨリスル駁撃モ信仰ガシツカト碇ヲ卸シテ居ル深イ底ノ底、理想ガ湧キ出デ世界觀ガ起リ來ル心ノ底迄ハ押シ寄セテ來ルヲ得ナイト云フ事ヲ悟ツタ。社會主義ノ活力ハ縱令マークスデアラウト、エンゲルスデアラウト、兎ニモ角ニモ個々ノ人ノ學說ニ根底ヲ發スル事ハ出來ナクテ、理想ニ對スル憧憬ト渴望トニ比ベテ現世ノ如何ニモ不完全ナヲ見テ斷ヘズ生レ來ル情熱ノ焰ノ中ニ活動ノ意思ノ炎タル中ニノミ求ム可キデアル事ヲ會得シタ。

是ニ於テ「マーキシズム」ノ批評ハ一新時期ヲ劃シタ。問題ノ要點ハ單ニ一定ノ『學說』「マークスノ進化說」ノ攻撃又ハ擁護ニアラズシテ「マーキシズム」ノ方法全體ノ正否如何ト云フ疑問ニ移ツタ、マークスハ昔ノ空想的社會主義ニ

對シテ科學的社會主義ヲ建テヤウトシタノデア
ルガ、今ヤ世人ハ其ガ根本的ニ間違ツタ企デア
ツタ事ヲ看破スルニ至ツタ。社會主義ト關係ア
ル限ニ於テマークスノ創見ガ非常ニ重要ナル所
以ハ其『科學的』ナ點ニハ有セナイデ、彼ガ社會
的運動ヲ史的發展ト利害關係トノ實際の基礎ノ
上ニ建設シタ事ニアツタ。然モ其事タルヤ科學
トハ全ク沒交渉デアル。社會主義ノ必然的ナル
事ヲ科學的ニ立證シヤウトシタマークスノ企圖
ハ失敗ト認メネバナラス。凡ソ社會的努力即チ
將來築キ上ゲントスル新組織ノ爲ニスル戰鬪ヲ
科學上ノ議論ニ依テ正當ダト證明スル事ハ誰ニ
ダツテ出來ル仕事デハナイ。科學ハ經驗セル世
界ノ因果關係ヲ發見スル以外ニ何等ノ使命ヲモ
有シナイ。科學ガ或ル要求、或ル將來ノ事物ヲ正
當ナリト『證明』シヤウトスル時ハ勿論ノ事、唯
單ニ之ヲ必然起ルベキモノダト『證明』シヤウト
スル時ニデモ、其ハ最早ヤ其固有ノ領域ヲ逸シ

去ツタモノデ、之ハ科學タル資格ニ於テナサレ
タ者トハ見ルヲ得ナイノデアアル。成ル程或ル實
際のノ努力ガ克ク其目的ヲ達スルノ手段トシテ
科學的ノ認識ヲ藉リ來ルト云フノハ確ニ有リ得
ル事デハアルガ、其ノ努力其レ自ラハ決シテ科
學的の認識デハナイ。之ガ正當ナルノハ其レガ
『眞』デアアルカラデハナクツテ、其レガ『價值』ア
リ『權威』アルカラデアアル。『科學的社會主義』ト
ハ其自體ニ於テ矛盾デアリ、『金ノ蹄鐵』デア
ル。思ヒ來レバ完成スベカリシハ、科學ト社會主
義トノ根本的分離デアツタ。斯クシテ始メテ兩
者ハ其正當ナ地位ヲ恢復スル事ヲ得、カクシテ
世人ハ社會科學ト社會主義トニ同ジカヲ以テ仕
ヘル事ガ出來ル様ニナル可キデアアル。

新派社會主義者ノ解脫ノ努力ハ此點迄デハ止
マランダ。社會主義的の信念ヲ科學トノ不自然
ナ結婚カラ離縁サシタ人間ガヤガテ此分離ヲ其
世界觀ノ全體ニ迄押シ進メテ行ク事ハ自明ノ結

果デアツタ。「マーキシズム」ノ批評ハ此一點ニ於テ世界觀ト自然科學トヲ引キ離シテ了ハウトスル努力ト合致シタ。

此兩場合ニ於ケル問題ハ如何ナル場合ニ科學ハ其固有ノ領域ヲ逸出スルカヲ發見シヤウトスルニアツタ。換言スレバ價值ト信仰トノ世界ニ通ジテ一般ニ當嵌マル規範ヲ掲ゲ來ラントスル時ニ科學ハ全ク他處ノ領分ニ立入ツテ居ルモノデアル事ヲ示サウトスルニアツタ。殊ニ其主眼トシタ處ハ宗教的確信ヲ科學ノ爪牙カラ救ヒ出サウトスルノニアツタ。ガ之ト共ニ社會主義者ノ宗教問題ニ對スル立場ハ全ク一變シテ來タ。疑モナク近代の社會主義ハツイ近頃迄非常ニ排宗教的旗幟ヲ翻エシテ居ツタ。其レニハ亦確カニ政治上ノ理由ガアルノデ、少クモ歐洲大陸諸國ノ教會ハ君主制資本制ノ組織ニ大體ニ於テ味方ヲシテ居ル所へ、當時宗教ト寺院トガ未ダ充分ニ區別セラレナカッタノデ、坊主憎ケレバ袈

裟迄ト云フ様ニ教會ニ對スル怨ガ愛ノ神様ニ迄及ボサレタ。然ルニ豈慮ランヤ、其神様ハ牧師連ガ自分ノ名ニ於テ資本制度ヲ辯護シタカラトテ如何トモナス事ガ出來ナイ罪咎モナイ神様ナノデアル。排宗教ノ此外部的理由ト並ンデ社會主義者ヲシテ宗教ヲ疎遠セシムル強力ナ内部的理由ガ作用シタ。彼等ハ信ズラク、善良ナル社會主義者タランガ爲ニハ一點一劃ノ末ニ至ル迄マークスノ世界觀ヲ奉ゼナケレバナラナイト。斯クテ彼等ガ鵜呑ミニシタマークスノ世界觀ハ其成立シタ時代即チフオイエルバッハ Feuerbach ノ時代ノ宗教ヲ敵視シナイ迄モ宗教問題ニ對シテ極メテ冷淡ナ風潮ニ依テ大ニ影響セラレテ居ツタ。然ルニ此世界觀ノ全部ハ自ラ誤ツテ纏フニ『科學』ト云フ着物ヲ以テシタガ、其科學ハ自分ノ本質ニ從ツテ遠慮會釋ナク客觀の眞理ヲ宣明スル。從テ人若シニシテ一ナリト考ヘラレタ科學ト社會主義トノ精神ニ對シテ同時ニ罪ヲ犯

スマイトスルナラバ、無神論モ亦ユメ疑フ可カラザル客觀的眞理ノ一ト見エタノデアツタ。既ニ然ウデアルカラ今世界觀ヲ其足械デアツタ科學カラ解キ放シタト同時ニ各個人ノ宗教ニ對スル立場モ亦自由トナツタ。世人ハ悟ツタ、科學ト社會主義トハ科學ト宗教トノ如ク、又社會主義ト宗教トノ如ク、更ニ又教會ト宗教トノ如ク互ニ何等關係ノナイモノデアルト。勿論今日ト雖モ尙ホ根本的ニ宗教ヲ敵視スル口吻ヲ漏ラス社會主義者ガナイデモナイガ、此ノ如キハ全ク修養ノ足りナイ仲間ニ限ツテ居ル。カクテ社會主義ノ學者ハ體系トシテノ「マーキシズム」ニ囚ヘラレテ居ツタ心ヲ解放サレテ茲ニ初メテ其精神上ノ平和ヲ恢復シ得タノデアツタ。

社會主義ヲ「マーキシズム」ト云フ鎖カラ解キ放シテ自由ノモノニシヤウトスル彼等ノ努力ハ實際家ノ仲間カラ有力ナ援助ヲ受ケタ。コレ蓋シ長イ間ノ歲月ノタツタ結果、マークスノ教

理モ社會的運動ノ發展ヲ助長スルト云フヨリ寧ロ妨害スル様ニナツタカラデアル。回顧スレバ數十年間マークスノ教理ハ社會主義的理想ノ實現ニ遠大ノ關係ヲ持ツテ居ツタ。「社會主義ノ時代ハ恰モ自然現象ノ如ク必ズヤ到來シナクレバナラス、社會主義ヲ教フルハコレ動カス可カラザル眞理ヲ宣傳スルノデアル」ト云フ理論ハ他ノ如何ナル思想ヲ以テシテモ與フルニ難イ一種ノ勢力ヲ社會的運動ニ與ヘタ。即チ此理論ハ自分ノ主張スル所必ズ成ル可シト云フ勝利ノ自覺ヲ強クシ、社會黨ノ成立ヲ確乎タラシメ、又疑フ迄モ無ク近代無產階級運動ノ最初ノ團結ノ機ヲ早カラシメタ。

然ルニ歲月ノ經過ト共ニ世人ハマークスノ理論カラ之ダケノ事ヲ得ル爲ニハ高イ價ヲ拂フタ事ヲ悟ツタ。何ゾヤ。社會的運動ノ内部ニ於ケル理想的潛勢力ヲ減ジタ事即チ之デアル。科學的ノ議論デ社會主義ノ當然來ラネバナラナイ事

ヲ『立證』スルニ慣レル程、彼等ハ理想ヲ創造スル力ヲ失ヒ、又大ニ感情ヲ高調ニ昇ラシムル力ヲ失フタ。彼等ハ前ヨリモ安全ニ前進スル事ヲ教ハツタ代リニ一飛躍ヲ試ムル能力ヲ次第ニ失フニ至ツタ。マークストエンゲルストハ全く非凡ナ科學的天稟ノ才ヲ持ツテ居タ代リニ又自ラ實際ニ對スル想像力ニ乏シイ缺點ヲ持ツテ居ツタ。彼等ノ體系ニ實際のナ思想ガドレ程アルカト檢シテ見ルト、其ノ驚ク許リ貧弱ナルヲ發見スル。將來ノ國家 *Zukunftstaat* ヲアル確定ノモノトシテ論述スル事ニ彼等ガ非常ニ臆病デアツタノハ、唯「ユードヒヤ」ナルモノヲ根本のニ嫌フテ居ツタカラ許リデハナクテ、價值ヲ創造スル能力ガ乏シカツタノニアルト説明シ得ベキ事ハ疑ガナイ。デアアルカラ彼等ノ體系ガ永ク社會主義者ヲ支配シタナラバ、一切ノ理想的ナ運動ヲ死滅セシメテ了ウ事ハ當然ノ結果デアアル。マークストエンゲルストノ前ニハ社會主義的運

動ノ道案内トシテ、明示サレタ理想アルヲ要シナイ。潑刺タル熱情ニモ用ハ無イ。是等ハ共ニ社會主義ノ『科學的』本質ニ矛盾シテ居ル。科學的社會主義ヲ擁護スベキ唯一ノ力ハ分析的ナ理解力アルノミデアアル。曰ク「勞動者階級ハ實現スベキ理想ナルモノヲ有シナイ。彼等ハ唯崩壊スベキ市民的社會ノ胎内ニ既ニ發達シタ新社會ノ要素ヲ自由ナラシムレバ足ルノデアアル」ト。

之ガ科學的社會主義ガ無產者階級ニ振リ當テタ有難クモナイ役割デアツタ。社會主義ノ歴史ヲ草スル人ニシテ若シフーリエ、Fourier ヲイトリリング Weiting ラサル Lassalle ノ著書ヲ繙イタ後ニ今日ノ社會主義ノ著書ノ與フル所如何ト對照スルナラバ、恐クハ愁然タル憂悶ノ情禁ズル能ハザルモノガアルデアラウ。如何ニ總テヲ通ジテ乾燥無味トナリ、如何ニ因襲のトナリ、如何ニ白々シクナリ、又如何ニ實際的トナツタ事デアアルゾ。アチラコテラニ尙ホ革命的ナ

文句ガ散在シテ居ルケレドモ、最早ヤ何人モ之ヲ信ジナイ。色ハ赤クトモ「インキ」ハ矢張り「インキ」デアル、生命ノ流ハ其中ニ溢レテ居ナイノデアル。

固ヨリ私ハコレ總テ「マーキシズムス」ノ罪デアルト云フノデハナイ。社會的運動ト雖モ時代精神ニハ貢ヲ納メネバナラナカツタ。藝術ノ世界ニスラ、詩歌ノ世界ニスラ、偉大ナ格調ト自由ト熱情トノ宿ラナイ今日デアル。徒ニ弄スル大言壯語ガ何等ノ價值ヲモ有シナイ時代ニ際會シタ社會的運動ハ其レ自身圓熟シテ來モシタシ『合理的』ニモナツテキタ。是等ハ皆承認シテ置カネバナラナイ。ガ之アルニ拘ラズ、時代ノ影響ト云ハンヨリモ、社會的運動ノ成熟ト云ハンヨリモ、マークスノ精神ヲ以テ精神トシタ事ガ最モ多ク此ノ運動ノ理想的ノ内容ヲ減殺シタト云フハ依然トシテ眞ナルヲ失ハナイ。勿論マークスノ精神カラ退歩シテ其思想ヲ初期ノ夢想的

狀態ニ返ス事ハ出來ナイ。モシ其ノ主張ヲ貫カウト思フナラバ根本思想ハマークスガ書イタノト同ジデナケレバナラナイ。即チドコマデモ現實的歴史の基礎ノ上ニ立タネバナラナイ。確ニ社會主義的思想ノ代表者ハ依然トシテ『近世經濟生活ノ發展ハ自ラ他ノ經濟生活ニ對スル條件ヲ完成スル、即チ資本制社會ヲ社會主義的社會ニ改造スル條件ヲ完成スル』ト云フ認識カラ力ヲ得ル事モ出來ヤウ。然シ、サレバト云ツテ社會問題ノ純平タル理性的の攻究ト竝ンデ、更ニ情性的のナ見解、更ニ夢幻的のナ見解、理想的のナ見解、及ビ道德的情緒ノ高調ヲ排斥シテシマウ必要ハナイ。社會的運動ハ最早現實主義ニハ飽キ飽キシテ居ル。而テ其今ヤ失ハントスル虞アルハ非現實的の觀念世界ヲ支配スル力ニ外ナラナイ。然モ此力ヲ得ヤウトスルノヲ妨グルモノハ實ニマークスノ方式デアル。然ラザレバ其應用法デアル。

翻ツテ思フニ、以上ノ如ク云ヘバトテ何モ虛無黨ト同ジ立場ニ立ツ必要ハナイ。(虛無主義ハ或點迄ハ現實主義ニ對スル理想的若クハ觀念的ナル反動的現象ト見做ス可キデハアルガ)即チ決シテジャングラウ「Jean Grave」様ニ「我等ハ何ガ行ヘルカ、行ヘナイカト云フ様ナ問題ニハ關係シナイ。我等ハ唯何ガ眞デアリ、善デアリ、美デアルカラ重シトスル。夫レ觀念ハ總テデアル」ト云フ必要ハナイ。然シ我々ハ唯何ガ實行シ得ベキカト問フニ止マラズ、同時ニ、イヤ眞先ニ何ガ善デアリ、美デアルカラ尋ヌ可キデアル。我々ハ觀念ハ總テバアルト叫ブ必要ハナイ。然シ觀念ナクンバ一切ノ努力ハ何等ノ雅致モナイ、平々凡々タルモノナルヲ確信セネバナラス。觀念ナキ時ニ人類ハ高ク自由ノ翼ヲ搏ツテ天ニ舞ウ能ハズシテ低ク地ノ上ニ這ハネバナラス。夫レ觀念ガ形ヲ取ツテ現ハレタモノガ即チ我等ノ理想デアアル。然モ這般ノ理想ハ我等ガ

心血ヲ注イデ熱中シ、心ノ熱デ湧キ立タシ、情熱ノ火ヲ以テ之ヲ鍛ヘテ初メテ生ズベキモノデア
ル。理想ハ溫カキ太陽デアアル。總テノ上ニ照リ
渡ラチバナラス。沈ンデバナラス。曇ツテハナ
ラス。夫ガ沈ミ夫ガ曇ル時ハヤガテコレ生アル
モノ、總テ亡ビ失ス可キ時デアアル。サンシモン
Saint Simon ガ將ニ死セントシテ其最愛ノ門弟
ロドリীগ Rodrigues ニ語ツタ言葉ハ永遠ニ忘
ラル可カラザル言デアラウ。曰ク「我友ヨ、大
事ヲ成サントスル者ハ必ズヤ滿腔ノ熱血ヲ注イ
デ事ニ當ラナケレバナラス事ヲ忘ル、ナ」ト。
モシ其理想的ノ熱心ガ消エ去ル可クンバ其運動
ハ最早ヤ潑潑タルヲ得ナイデ、日常茶飯ノ事ト
ナリ、空漠タル政論ノ類トナリ了ツテ遂ニハ魂
ノ抜ケタ體トシテ凋ビ去ル可キデアアル。而テ無
産者階級解放運動ノ先導者中清新ノ氣ノ全然缺
ケテ居ル者ノ多イ所以ハ、彼等ガ其日其日ノ政
治ニ追ハレテ塵埃臭イ空氣ノ中ニ其靈感靈動ス

ル力ヲ失ヒ不平政客ノ列ニ下ツテシマツタ點ニ存スル。

斯ク云ヒ來レバ多クノ人ハ問ヲ發シテ云フデアラウ、如何ニシテ社會主義ハマークスノ手デシツカト印セラレタ歴史の現實的特性ヲ維持シ乍ラ、現在缺如タル其理想家流ノ高調セル思想ヲ得ル事ガ出來ルカ。是レ正ニ結ビ合ハス可カラザルモノヲ結ビ合ハサントスルコトデハアルマイカ。倫理主義ト云ヒ理想主義ト云フ、コハコレ將來尙ホ永ク社會主義ノ根本思想タル可キ進化主義ト矛盾スルモノデハアルマイカ。未來ヲシテ運命ノ星ノ導クガ儘ニ發展セシム可キ代リニ、我々ノ自分勝手ナ意匠ニ從ツテ之ヲ作り出サントスルハヤガテコレ矛盾ナノデハアルマイカト。

私ハ信ズル、這般ノ矛盾ハ世人ガ進化主義ヲ誤解スル時ニ存スルガ如ク見ユルニ止ツテ、其實是等ノ言ノ眞義ヨリスレバ所謂矛盾ノ虞ナキ

コトヲ。即チ世人ハ人類ノ歴史ト自然ノ過程トヲ充分嚴格ニ區別シナイカラ、マークスヲ論ズルニ當ツテモ、進化主義ト宿命主義トヲ混同シテ思ヘラク、「史的進化ハ人類ノ行爲ト無關係ニ完成セラレタ自然ノ過程ニ等シイ、個々人ハ唯手ヲ拱イテ、事實ガ熟シテ摘ミ得ル様ニナル迄待ツテ居ラネバナラスモノデアル」ト。然モ這般ノ宿命論の見解ハ進化ノ根本思想トハ何等ノ關係ヲモ持ツテハ居ラナイ。是レ實ニ社會的生活ニ起リ來タル一切ノ事實ハ生アル人間ノ間ニ起ルモノデアル事、及ビ人類ハ其目的ヲ定メ之ガ實現ニ努力スルニ依テ是等ノ發展ヲ完成スルモノデアルコトヲ九デ頭ノ中ニ置カナイ話デア

ル。

斯クシテ世人ハ社會學者トシテノ立場ト自ラ社會生活ニ處スル時ノ立場ト此二ツノ全然相異レル立場ヲ混同シテシマウ。前者ハ生活ノ態様ノ由テ來ル所ヲ行爲者ノ動機ニ求メ、然モ其動

機ヲ明確ニ解釋セント努ムルガ故ニ、其範圍ニ於テ社會的發展ハ必ズヤ因果律デ支配サレル出來事デアル、即チ社會的生活ハ過ギ去ツタ從テ其經過ノ明白ナ過程デアルトスル。反之、政治家ニ取ツテハ社會的生活ハ將來ニ於ケルアル未定ノモノデアリ、又將來ニ於テ作り上グベキモノデアル。人類行爲ノ目的ヲ學者ハ一定ノ原因ノ結果ナリトシテ考ヘルニ反シテ、政治家ニ取テハ之ガ其意思ガ達セント欲スル未來ニ横ハレル標的トナルノデアアル。

固ヨリ此意思其物モ社會的事實ヲ支配スル因果關係中ノ必然ノ一分子デハアル。而シテ此ノ意思ハ、ドウ云フ條件ニ繫ツテ居ルニシテモ、其行爲ヲナス人ノ最モ個人的ノ所有物デアル事ヲ妨グルモノデハナイ。其ハ動機ニ溯ツテ研究スル學者ノ立場カラ云ヘバ不自由デアルガ、其目的ヲ立テ、居ル人間ノ立場カラ見レバ自由デアル。ダカラ若シモ社會學者ガ一定ノ意思ノ趨

向從テ社會生活發展ノ一定ノ徑路ヲ未來ニ向テモ必然カクアル可キモノト立證シヤウト試ムル時ニハ、常ニ自明ノ制限ニ出會ハザルヲ得ナイ。即チ行爲者ガ或ル決心ヲナシ之ヲ實行シヤウトスル精力ガ未來ニ於テモ減ゼザルモノト假定セザルヲ得ナイ事之デアル。假ニモシ何等カノ原因例バ靜寂の人生觀ノ旺盛ヨリシテ此ノ精力ガ無クナルナラバ、豫メ假定シタ因果ノ連鎖ノ最も重要ナ部分ガ消エ失セテ社會生活ノ發展ハ全然違ツタ徑路ヲ採ルデアラウ。自然法の過程ニ關スル考ヲ盲目滅法ニ社會生活ニ迄押及ボサウトスルコト、即チ我々場合ニ就テ云ヘバ「社會主義ハ自然の必然的ニ來ラテバナラス」ト云フノハ全ク誤謬デアル。例バ資本制ノ發展ハ近代文化ノ崩壞ニ到達スベキモノデアルカ、ソレトモ又近時アル米國人ノ立派ナ著書ニ豫言サレタ様ニ資本制ノ基礎ノ上ニ新シイ封建制度ヲ建設スルニ至ル可キカハ全ク豫見スベカラザル處ニ

屬スル。否若シモ無產者階級運動ノ統率者タルモノガ退嬰主義又ハ靜寂主義ニ因ハレテ社會生活ノ變遷セル間ニ處シ新社會組織ニ必要ナ特徴ヲ發展セシムルニ務メナイナラバ、イツカハ必ズヤ後者ノ運命ニ陷ラザルヲ得ナイ。彼等ニ向テハ一切ノ社會事實ハ努力シテ達セラル可キ狀態デアル。而テ此將來ニ存スル狀態ヲ齎サンガ爲ニハ彼等ニ滿腔ノ熱望ガ必要デアル。斷乎タル決心ガ必要デアル。

進化主義ト理想主義トノ間ニ何ダカ矛盾ガ有ルラシク思ハレル原因ヲ探ルト其一部分ハ理想ト綱領(黨派ノ)トヲ混同シ。目的ト手段トヲ混同シ、信仰ト政策トヲ混同シタノニ存スル。一ハ我々ノ情性ニ屬シ、他ハ我々ノ理性ニ屬スルモノ、嚴格ニ區別セラレバナラナイ物デアル。最後ノ目的ニ對スル情熱ハ實際上ノ政治的手段ノ實行ニ際スル明晰ナル頭腦ト伴ハチバナラヌ。溫カサハ前者ニ求ム可ク、明ルサハ後者ニ

尋ヌ可シ。前者ハ理想ノ爲メニアル可ク、後者ハ手段ノ爲メニ存ヌ可シ。斯クテ最後ノ目的ノ貫徹ニ要スル手段ト方法トハ授ケラル可キデアラウ。

如上二個ノ全然異ツタモノヲ區別シ得テ初メテ理想的ナ熱烈ノ情ト冷靜ナ政治上ノ智識トヲ兼備スルヲ得ベキデアラウ。綱領ヲ理想ダト思ヒ誤ル人ハ詫シイ其日々々ノ仕事ニ追ハレ、理想ヲ綱領ダト思ヒ込ム人ニハ政治上ノ成功ノ望ガ絶エ果テル。手段ト目的トヲ區別シ得タル人ニシテ初メテ政治ト云フ荊棘ヲ搔キ分ケテ遠ク隔ツテ居ル目的ニ達シヤウトスルニハドレ程ノ努力ガ必要デアルカヲ看取スルデアラウ。荊棘生ヒ茂ル途ヲ辿リ行ク時ノ唯一ノ慰藉ノ太陽デアル理想ノ價值ト本質トヲ豫メ深く洞察シ得タルトキニ初メテ一步一步ト進ンデ行ク改革ノ重要ト必要トヲ悟リ、進化ノ本性ヲ了解スル事ガ出來ルデアラウ。

現代ノ社會主義者中卓越セルモノハ總テ以上

ノ理論ヲ明白適確ニ看破シテ居ル。而テ之アル

ガ爲ニマークス超越ノ運動 (Los. von Marx-*Re-*
wegung) ガ起ツタ。ヨシ今日公然且明瞭ニ之ヲ

自覺シテ居ルモノハ少イトシテモ、各國ノ社會

民主黨員中此運動ニ左袒セルモノ、數ハ決シテ

少クナイ。實ニ嘗テ一度マークスノ精神ヲ以テ

充サレテ居ツタ人ガ即チ此解放運動ノ先達トナ

ツテ居ルノデアル。彼等ハ決シテマークスニ叛

旗ヲ翻エシタ者デナイ。唯「マークシズムス」ノ

史的限界ヲ認識シタ者ニ過ギナイ。彼等ハマー

クスニ反對スル者デナクテ、唯マークスニ後ル

ルヲ欲セザルモノデアル。否彼等ハマークスヲ

超越セントスルモノデアル。「マルクスハ我が友

ナリ、サレド社會主義ハ更ニ親シキ我が友ナリ」

(*Amicus Marx, sed magis amicus socialismus.*)

トナスモノデアル。彼等ハマークスガ自ラ建テ

タ建物ガマークスニ依テ破壊サレントスルヲ傍

觀スルヲ欲セザル徒デアル。

此新趨向ヲ代表スル米國ノ社會主義者ヘロン

George D. Herron ガ明言シタ様ニ「イクラマー

クスノ教義ヲ反覆シタツテ夫レダケデ社會主義

的革命ハ起ルモノデナイ。勞働者階級ハ社會主

義的教理ノ爲ニ存スルノデハナクツテ、社會主

義的教理ガ勞働者階級ノ爲ニ存スルノデアル。

思フニエンゲルス程熱心ニ社會主義ノ用語ヲ實

際ノ事情ニ順應セシムルノ必要ヲ指摘スルニ苦

心シタ者ハアルマイ。之レ實ニ我々ノ學ハ子バ

ナラス所デアル。夫レ社會主義ハ決シテ一個ノ

正統ノ教理トシテ、又タ一個ノ宗派ノ教理トシ

テ、此ノ地上ニ來ルベキモノデハナイ。唯ダ生

命ノ新ナル流トシテ湧キ出デチバナラナイモ

ノデアル。

然ルニ生命アル新理想ヲ以テ無產者階級ノ行

手ヲ照シ得タ人ハ一人トシテ無いガ故ニ、世人

ハ今正ニ暗中摸索ノ狀ニ陥ツテ居ル。

斯クテ彼等ハ無理想ノ瀾縫主義、古イ基督教
的又ハ博愛的理想ト、革命ニ憧ル、皮相的理想

トノ間ニヨロメイテ居ル。其結果現ハレ來ル可
キモノガ何デアルカハ今日何人カ果シテ豫見ス
ル事が出來ヨウゾ。

「マーキシズムス」ノ批評ハ以上ヲ以テ終ル。但ゾムバルト
ハ章末ニ左ノ數句ヲ置テ次章トノ聯絡ヲ取ツテ居ル。マ
ークスノ體系ト呼バル、衣物ヲ咬ミ耗シ、引ッ極イテホ
ロボロニシテシマウ迄ニ批評ガ盛ンデアツタ過去十年間
ニ一新教理ガ成立シタ。多クノ有識者ハ此新シイ救ノ教
ノ中カラ新シイ朝日ハ登ル可シト翹望シテ居ル。彼等ハ
新希望ノ象徴ガ其中ニ微見エルト見テ居ルノデアル。

此新光明ノ支配スル思想ハ充分ノ研究ヲ試ムルノ興味
アルト同時ニ、「マーキシズムス」ノ批評ニ捧ゲラレタ本
章以外ニ別ニ之ガ描寫ヲ試ムルニ足ル特徴ヲ持ツテ居ル
私ノ思フテ居ルノハ外デハナイ、即チ革命的「サンダ
カリズムス」Revolutionärer Syndikalismusデアル。

(完結)

雜 報

●獨逸中産階級ノ家計 獨逸帝國統計局ハ先般
同國中産階級ノ家計ニ關スル調査ヲ公ニシタリ
此調査ハ同國ノ重ナル都市ノ統計局ノ協力ヲ得
テ、各市ノ中産階級ニ屬スル若干ノ家族ノ一箇
年間ノ家計簿ヲ檢シテ成レルモノナルガ故ニ、
費目ノ分類、負債額又ハ貯金額ノ計算法等ニ統
一ヲ缺クモノアリ、未ダ以テ完全ナル統計ヲ得
タルモノト云フベカラズト雖モ、兎ニモ角ニモ
獨逸中産階級ノ家計狀態ノ一般ヲ窺フニ有益ノ
材料ヲ供セルモノナリ。

調査世帯數四千三百三十六ノ中、或ハ初メヨリ
家計簿ノ檢閲ヲ拒メルモノアリ、或ハ一二ケ月
若クハ數月ニシテ記帳ヲ止メタルモノアリ。結
局一年ヲ通ジテ記帳ヲ繼續セルモノ、不明瞭ノ
爲メニ捨テタルモノヲ除キテ、八百五十二ノ家

計簿ヲ檢シ其ノ結果ヲ公ニスルコトヲ得タリ。
(但シ調査報告書ノ附録トシテ其ノ記帳通ジテ
一年ニ及バザルモノ百十八ヲ載セテ參考ニ供セ
リ)。

本統計ハ概ネ一年三千「マーク」マデノ所得ア
ル家族ニ就テ調査セルモノニシテ、其ノ

收入額	平均	二、一九二
支出額	同	二、二三四

ナリ。支出ガ收入ニ比シテ四十二「マーク」多キ
ハ蓋シ調査方法ニ不充分ノ點アリシニ因ルベシ
今、家族員ノ數多キトキハ其ノ收入額概シテ
多キコト左表ノ如シ。

家族員ノ數	總收入額
二—四人	二、〇六九・九八
五—六	二、三〇八・二四
六以上	二、三二〇・二五

以上三種ノ家族ノ間ニ於ケル收入額ノ差各々約
二百五十「マーク」アリト雖モ之ニ依テ頭數ノ多
キ家族ノ家計ヲ支フルハ困難ニシテ、大ナル家

族ハ勢ヒ其ノ支出ヲ制限セザル可カラズ。即チ
二—四人ノ小家族ハ一人ニ付平均六百二十三
「マーク」ヲ支出スルコトヲ得ベシト雖モ、五—
六人ノ家族ハ一人ニ付四百四十「マーク」ノ支出
ヲ以テ満足セザル可カラズ、更ニ夫レ以上ノ大
家族ニ至テハ一人ノ平均額僅カニ三百二十一
「マーク」ニ過ギズ。固ヨリ家族員ノ數多キ割合
ニ多クノ支出ヲ要スルモノニアラズ、住居費ノ
如キハ殊ニ然リ。又大ナル家族ニハ消費量ノ少
キ小兒ノ數多キヲ常トス。依テ之ヲ大人ヨリ成
ル「ノルマル」ノ世帯ニ換算シテ比較スルモ、一
人ノ消費シ得ベキ金額ハ小家族ノ九百九十六
「マーク」ニ對シ、大家族ノ七百五十二「マーク」
ナルヲ見ル。然ラバ消費ノ節約ハ如何ナル費目
ニ就テ行ハル、ヤヲ見ルニ左ノ如シ。

	家族員	五人	六人以上
食料費	二—四人	四六〇	四九八
衣服費	二—四人	二二六	二二六

住居費	一九四	一七二	一五四
暖爐及點燈費	四一	四〇	四〇
其他	二〇五	一九九	一七二

即チ食料費ハ節約スルコト最モ難キ費目ナルガ故ニ、家族員ノ數ノ増加ニ伴ツテ増加セザルヲ得ズ。次ニ彼等ノ間ニ在リテ衣服ヲ調製スルハ日常缺クベカラザルモノニ限ラル、ガ故ニ、家族員増加スレバ其ノ費目亦多少ノ増加ヲ免レズ從テ費用ノ節約ガ先ヅ住居、暖爐、點燈ノ費用ニ就テ行ハル、ヲ見ルベシ。

然レドモ仔細ニ食料費ノ内容ヲ檢スレバ、大ナル家族ニテハ單ニ生活ヲ維持スルニ缺クベカラザル費ニ急ニシテ嗜好品ニ多クノ費用ヲ投ズルノ暇ナキヲ見ル。即チ小家族ハ食料費ノ二割七分四厘ヲ肉類ノ爲メニ支出シ得ルニ對シ、大家族ハ二割三分九厘ヲ支出スルニ過ギズ。之ニ反シ「パン」類ニ費ス所、小家族ハ一割三分七厘ニシテ大家族ハ二割一分六厘ナリ。而シテ麥酒

及煙草代竝ニ飲食店ニ於ケル支出高ハ、小家族ノ一割三分五厘ニ對シ、大家族ハ僅カニ七分九厘ニ過ギズ。
更ニ所得額ノ多少ト支出費目トノ關係ヲ見ルニ左ノ如シ。

	所得	額
食料費	1000「ヤク」以下	52.3
被服費	1000「ヤク」以下	10.7
住居費	1000「ヤク」以下	17.8
暖爐點燈費	1000「ヤク」以下	4.7
其他	1000「ヤク」以下	14.6
食料費	1000「ヤク」以上	36.2
被服費	1000「ヤク」以上	14.3
住居費	1000「ヤク」以上	18.5
暖爐點燈費	1000「ヤク」以上	3.5
其他	1000「ヤク」以上	27.5

從來ノ經驗ニヨレバ、所得増加スルモ住居費ハ之ニ準ジテ増スモノニ非ズ。然ルニ右ノ表ガ所得増加ニ伴ヒ住居費ノ増加セルコトヲ示スハ蓋シ調査上ノ缺點ニ基クモノナリ。即チ所得ノ多キハ主トシテ官吏及ビ大都會ノ住民ナルガ、大都會ニテハ家賃高ク、官吏ハ勞働者ニ比シ住居ノ慾望大ナルノ事實ガ、如上ノ結果ヲ來セル

ナリ。

而シテ食料費ノ内譯ニ就テ云ヘバ、「二千」マーク以下ノ所得アル家族ハ肉類ニ二割五分四厘ヲ支出スルニ對シ、三千「マーク」ノ所得アル家族ハ二割七分一厘ヲ支出ス。從テ「パン」類ニ對スル支出ハ前者ノ一割七分三厘ニ對シ、後者ハ一割四分七厘ヲ支出セリ。

最後ニ住居地ト支出費目トノ關係左ノ如シ。

	大都會	中都會	小都會	地方ノ小都會	田舍
食料費	四六九%	四三六%	三六六%	三四五%	四〇六%
被服費	二三三%	一三七%	一三九%	一四〇%	一六五%
住居費	一八四%	一六五%	一七〇%	一六六%	二二九%
暖爐點燈費	四〇%	四四%	四〇%	四六%	四九%
其他	一八四%	二二八%	二六五%	三〇三%	二五一%

凡ソ大都會ノ住民ハ其所得ノ大部分ヲ單ニ生命維持ノ爲ニ投ゼザルベカラズ。其ノ住居地ノ小ナルニ從ヒ、其他費用例ヘバ「コンフォート」ノ爲メニ又ハ高尚ナル慾望ヲ充ス爲メニスル費用

トシテ餘ス所大ナルモノナリ。本調査ニ於テハ材料ノ不充分不平均ナルガ爲メニ、其ノ差異時ニ異例ニ大ナルモノアリト雖モ、大體ノ傾向ハ之ヲ認ムルコトヲ得シ。(Schmoller's Jahrbuch, 1910, I. Heft. 所載 Ernst Günther, Der Haushalt des kleinen Mittelstandes und der Arbeiter. ニ據ル)

●英國貧民ノ減少 六月二十五日ノ調査ニヨル

ニ、英蘭及ウエールスニ於テ、救助ヲ受クル貧民數ハ、七六二、一一一人ニシテ、前年度ノ七八四、四三四ニ比スレバ、二分八厘ノ減少ナリ。内住宅ヲ有スル貧民ハ二六〇、四四九人ニシテ住家ナキモノハ、五〇一、六六二人ナリ。次表ハ各月末ニ於テ救助ヲ受ケタル貧民數ニシテ、著シク改良ノ行ハレタルヲ證ス。

各月末	人口千人ニ對スル比例
一月	一九〇九年
住宅アリ貧民	八二
住宅ナキ貧民	二五九
總計	三四一
住宅アリ貧民	八二
住宅ナキ貧民	二五二
總計	三四四

二月 八二 一五八 二四〇 八二 一五一 三三三
 三月 八一 一五七 二三八 七九 一四八 三三七
 四月 七七 一五二 二二九 七七 一四四 三三一
 五月 七五 一四九 二二四 七五 一四三 三二八
 六月 七四 一四八 二二二 七三 一四〇 三二三

而シテ、救助ヲ受クル貧民ノ減少ハ、住家ナキモノニ於テ現出セリ。次表ハ過去十年間ニ於ケル六月末ノ貧民狀態ヲ示スモノナリ。

年次	人口概數	住宅アルモノ	住宅ナキモノ	總計	住宅アルモノノ總計	住宅ナキモノノ總計	對スル比例
一九〇〇	三、一八六、三六五	一、八八、六九〇	四七三、七七八	六〇〇、八六八	五九一、四八二	一〇、三七七	二〇・七
一九〇一	三、二四九、一八七	一九四、二九〇	四七九、〇〇〇	七七三、三七〇	六〇一、四八九	一七二、〇九	二〇・九
一九〇二	三、三二二、六三三	二〇〇、七七七	四八五、五五六	六八六、三三三	六三二、四九二	五三、八四一	二一・一
一九〇三	三、三九七、六六六	二〇八、九六五	四八七、七三九	六九六、二九四	六三三、一四八	六三、一四六	二一・二
一九〇四	三、三七八、三三八	二四八、八六六	五〇六、四七七	七五五、三三四	六六二、一五二	九三、一八二	二二・九
一九〇五	三、三七三、四三四	二五三、六三三	五二四、四一四	七七八、〇四五	六九一、一五六	八六、八八八	二三・五
一九〇六	三、四一五、三九七	二三四、〇〇四	五二七、三九九	七五五、三九三	六九一、一五一	六四、二八二	二二・〇
一九〇七	三、四四七、〇二六	二五九、七三三	五二九、九〇四	七五五、六三七	六九一、四九二	六四、一四〇	二二・八
一九〇八	三、四九四、六〇〇	二四九、三〇六	五二九、九七七	七六九、二八三	七二一、四九四	四七、七八〇	二二・〇
一九〇九	三、五三四、七八〇	二六二、一七三	五三三、六二二	七九五、七九四	七四一、四八八	五四、三〇六	二二・二
一九一〇	三、五七五、六一五	二六〇、四四九	五三〇、六六三	七九一、一一二	七三三、一四〇	五八、九七二	二二・三

倫敦ニ於テハ、五月十四日及二十八日ニ終ル週ヲ除ク外、毎週救助ヲ受クル貧民數減少シ前記二週ハ一九一人及一八九人ノ増加アルノミ。是等ノ減少原因ハ、全ク住家ヲ有セザル貧民數ノ減少ニ基クモノニシテ、倫敦人口千人ニ對スル貧民數ハ、四月ニ於テ二五・二人五月ニ於テ二四・六人ノ比例ナリ。前年ノ同兩月末日ニ於テハ、二五・七人及二四・八人ノ比例ヲ示セリ。

●獨逸穀物稅ト獎勵金 獨逸ニ於テハ、穀物ニ高率ノ輸入稅ヲ課セルガ、獨逸關稅制度ニヨルニ、穀物ヲ輸出スル際ニ、輸入票(Import certificate)ヲ貰ヒ置キ、六ヶ月以内ニ此輸入票ヲ以テ穀物ヲ輸入セバ、輸入稅ハ免除セラル、コト、ナリ、其輸入スル穀物ハ、先キニ輸出セルモノト同一ナルコトヲ要セザルコト、セリ。之ガタメニ此輸入票ハ或程度マデ輸出獎勵トナリ、爰ニ獨逸ノ國境ニ於ケル、穀物及穀粉業ニ珍ラシキ現象ヲ呈シ、獨逸穀商ハ露國ニ「ライ」麥ヲ輸

出シ、之ヨリ粉ヲ製造シ、其穀ハ規則上家畜飼養料トシテ、無稅ニテ輸入シ得ルタメ、此穀ニ對シテ十分ナル獎勵金ヲ得ルノ結果ヲ生ズ。即チ「ライ」麥ノ輸入稅ハ一噸ニ付五十馬克ナルニ彼無稅輸入ヲナシ得ルニ使用スル輸入票ハ、其券面ニ記載シアル課稅額相當ノ價ヲ以テ賣買セラル、故、輸入シ來ル穀ニ對スル獎勵金ハ二十五志ヨリ少カラズトイフ。是ニ於テ獨逸商人ハ、年々露西亞ニ多額ノ「ライ」麥ヲ輸出シ、國境ニ近キ露都ニ於テ製粉ヲ經營スルニ至リ、新穀稅ノ實施セラル、前三年間ニ、露國ニ輸出セラレタル「ライ」麥ハ、三萬三千噸ニ過ギザリシガ、一九〇九年ニハ露國ニハ多大ノ收穫アリシニモ拘ラズ、十一萬九千噸ニ上レリ。而シテ露都ノ一ナルカリシユノ製粉場ハ、數年前マデ一日十噸乃至十五噸ノ製粉力ヲ有スルニ過ギザリシニ、今日ニテハ一日四百噸ノ製粉力ヲ有シ、遠カラズシテ獨逸商人ノ製粉所設立ニヨリ、此ノ製造

力ハ六百五十噸ニ及ブベシトイフ。之ト同一ノ狀況ハ他ノ國境都市ニ於テ之ヲ見ルコトヲ得ベク、斯クシテ外國ニ於ケル獨逸人ノ製粉所ノ盛大ナルタメ、獨逸內國ノ製造業者ハ其打撃ヲ受ケテ、業務不振ヲ歎ジツ、アリトイフ。

●本邦電氣事業ノ現況 電燈 明治十五年七月東京

電燈會社ガ初テ銀座街頭ニ二千燭光弧光燈ヲ點ジ、邦人ノ膽ヲ奪ヒシハ、早クモ已ニ昔話トナリ、明治二十年ノ末、電燈營業ヲ開ケルヨリ今ニ至ル迄、二十餘年、其間彼ノ二十七八年ノ日清戰爭ノ頃ヨリ電燈企業頓ニ勃興シ、現在ノ電燈事業ハ事業者數百六十二ヶ所、其發電力十一萬三千五百九十四キロワットニ達セリ。

電燈事業年加表

開始年次	會社名	電氣容量 キロワット	原動力 水力(豫備) 火力
明治二十年	東京電燈	二七〇	水力
同二十一年	神戸電燈	四九〇	火力
同二十二年	大阪電燈	八六〇	火力
同二十二年	京都電燈	二九〇	水力
同二十二年	名古屋電燈	三三〇	水力
同二十三年	橫濱電氣	七九六	水力

〔電氣ノ友〕所載中原工學士調查

明治二十四年	京都水利部	一七五	水	力	明治三十年	青森電燈	四〇〇	水	力
同	熊本電燈所	一三〇	火	力	同	津電燈	七〇〇	火	力
同	札幌水力電氣	四〇〇	水	力	同	伊勢電氣鐵道	三三〇	火	力
同	長崎電燈	五五〇	火	力	同	和歌山水力電氣	二〇〇	水	力
同	下野電力	九〇〇	水	力	同	岡崎電燈	六三〇	水	力
同	豐橋電氣	三〇〇	水、火	力	同	四日市電燈	一四〇	水、火	力
同	岡山電燈	二五〇	火	力	同	博多電燈	七四〇	火	力
同	高崎水力電氣	二〇〇	水	力	同	尾道電燈	七〇〇	火	力
同	桐生電氣	一五〇	水他ヨリ受	力	同	新潟水電	六三〇	水	力
同	岐阜電氣	六〇〇	火	力	同	山口電燈	五五〇	火	力
同	宮城紡績電燈	一九五	水	力	同	土佐電氣鐵道	四〇〇	水	力
同	關西水力電氣	五〇〇	水	力	同	長野電燈	六〇〇	水	力
同	廣島電燈	三〇〇	火	力	同	姫路電燈	五五〇	水、火	力
同	德島電燈	二〇〇	火	力	同	若松電燈	一六〇	水	力
同	松江電燈	二九〇	水	力	同	鹿兒島電氣	四〇〇	水	力
同	駿豆電氣鐵道	一五〇	水	力	同	八幡水力電氣	六〇〇	水	力
同	高松電燈	一〇〇	火	力	同	米澤水力電氣	三五〇	水	力
同	京都電燈大津支社	一五〇	水供給	力	同	富山電氣	二六〇	水、火	力
同	岩代福島電燈	三〇〇	水	力	同	廣島水力電氣	九〇〇	水	力
同	函館水電	一六〇	水	力	同	京都電燈	九〇〇	水	力
同	馬關電燈	三三〇	火	力	同	郡山絹絲紡績	八〇〇	水	力
同	靜岡電燈	三三〇	火	力	同	松本電燈	三三〇	水	力
同	同三十年	三三〇	火	力	同	同	同	同	同

明治三十三年	飯田電燈	一五	水	力	明治三十六年	京都電燈中津支店	八	火	力
同同	新宮水電	三〇	瓦斯	力	同同	信濃電氣	三〇	火	力
同同	小田原電氣鐵道	四〇	水	力	同同	高岡電燈	六〇	火	力
同同	甲府電力	六〇	水、火	力	同三十七年	巖倉水電	一〇〇	水	力
同同	山形電氣	一五〇	水	力	同同	埼玉電燈	六〇	瓦斯	力
同同	金澤電氣瓦斯	六〇	水	力	同同	豐後電氣鐵道	四〇	水	力
同同	竹田水電	六〇	水	力	同同	安曇電氣	一五〇	水	力
同同	小倉電燈	一五〇	火	力	同同	飛彈電燈	一五〇	水	力
同同	鶴岡水力電氣	四〇	水	力	同同	日田水電	一五〇	水	力
同同	北越水力電氣	一三〇	水	力	同同	谷村電燈	一五〇	水	力
同三十四年	諏訪電氣	一五〇	水	力	同同	濱松電燈	一五〇	水	力
同同	弘前電燈	一四〇	水	力	同三十八年	川越電氣鐵道	一六〇	火	力
同同	京濱電氣鐵道	一〇〇	火	力	同同	日光町レーキサイイズホテル	一五〇	水	力
同同	喜多方水力電力	六〇	水	力	同同	盛岡電氣	一五〇	水	力
同同	秋田電氣	一五〇	水、火	力	同同	明石電燈	一五〇	火	力
同三十五年	會津電力	一三〇	水	力	同三十九年	中津電氣(美濃)	一三〇	水	力
同同	九州軌道	一三〇	火	力	同同	須賀川電氣	一五〇	水	力
同同	上田電燈	一三〇	水	力	同同	伊東水力電氣	一五〇	水	力
同三十六年	伊豫水力電氣	一五〇	水、火	力	同同	宮ノ下水力發電所	一五〇	水	力
同同	加計電燈事務所	六〇	水	力	同同	大阪佐世保支店	一五〇	火	力
同同	讀岐電氣	一三〇	火	力	同同	多治見電燈所	一五〇	水	力

明治三十九年	松阪水力電氣	二七〇	水	力	明治四十一年	明知町營電氣	五〇	水	力
同	岩内水力電氣	二〇〇	水	力	同	辻町水力電氣	二〇〇	水	力
同	溫海電氣	二四〇	水	力	同	福島電氣(信濃)	五〇	水	力
同	小樽電燈	二九〇	火	力	同	大阪電燈舞鶴支店	三〇〇	火	力
同	上越電氣	五〇〇	水	力	同	富士電氣	二五〇	水	力
同	鳥取電燈	一〇〇	水	力	同	玉川電氣鐵道	五〇	火	力
同	千葉電燈	三三〇	水	力	同	秋田木材	二〇〇	火	力
同	横須賀電燈	四〇〇	火	力	同	伊香保町營電燈	四〇	水	力
同	久留米電燈	二五〇	水受給、	水	同	天龍電力	一五〇	水	力
同	日向水力電氣	三〇〇	瓦斯	力	同	廣瀨水力電氣	一〇〇〇	水	力
同	茨城電氣	三三〇	瓦斯	力	同	阪神電氣鐵道	八〇〇	火	力
同	日本窯素肥料	六〇〇	水	力	同	利根電力	五〇	水	力
同	岩村電氣軌道	六〇	水	力	同	川俣電氣	三〇〇	水	力
同	今治電氣	一八〇	水	力	同	洛北水力電氣	二五〇	水	力
同	江ノ島電氣鐵道	一五〇	火	力	同	後藤寺電燈	六〇	火	力
同	旭川電燈	一八〇	火	力	同	酒田町營電氣	二〇〇	水	力
同	渡良瀬水力電氣	三三〇	水	力	同	小口工場電燈部	二五〇	火	力
同	北海道炭礦汽船	七五〇	火	力	同	高知縣營水力電氣	一三〇〇	水	力
同	敦賀電燈	五五〇	火	力	同	博多大牟田支店	二二〇	火	力
同	直方電氣	二五〇	火	力	同	四日市製紙	三〇〇	水	力
同	二本松電氣	五〇〇	水	力	同	新潟水力電氣	五〇〇	水	力

明治三十一年	名古屋電氣鐵道	五〇〇	火力	二五六
同 三十二年	京濱電氣鐵道	一、二〇〇	火力	三九
同 三十三年	小田原電氣鐵道	三〇〇	水力	九一
同 同	豐後電氣鐵道	二〇〇	水力	七一
同 三十五年	江ノ島電氣鐵道	二五	火力	六五
同 三十六年	伊勢電氣鐵道	一七〇	火力	二六
同 同	大阪市營電氣鐵道	三〇〇〇	火力	六六
同 同	東京鐵道	一、三六〇	火力	二一四
同 同	土佐電氣鐵道	三〇〇	水、受給	二六
同 三十七年	橫濱電氣鐵道	三〇〇	火力	六七
同 同	元甲武線電車併用	九五〇	火、受給	一六〇
同 三十八年	阪神電氣鐵道	八〇〇	火力	六〇
同 三十九年	川越電氣	一〇〇	火力	八〇
同 同	駿豆電氣鐵道	一〇〇	水力	四一
同 同	岩村電氣鐵道	六〇	水力	七五
同 同	玉川電氣鐵道	四〇〇	火力	九三
同 四十年	南海鐵道	一、〇〇〇	火力	三〇
同 同	瀬戸電氣鐵道	一五	火力	九六
同 四十一年	龍野電氣鐵道	二〇〇	火力	八七
同 四十二年	岩國電氣鐵道	五〇	火力	三〇
同 同	和歌山水力電氣	二〇〇	水力	九二

明治四十二年	吳電氣鐵道	二六二	火力	三二
同 同	山ノ手線電車併用	五〇〇	火、受給	三〇
同 同	伊那電氣鐵道	五	水力	三六
同 同	福博電氣鐵道	二四〇	火力	七二
同 四十二年	箕面有馬電氣鐵道	二〇〇	火力	六六
同 同	兵庫電氣鐵道	六五〇	火、受給	七〇
同 同	嵐山電氣鐵道	一〇〇	火力	四六
同 同	神戸電氣鐵道	一、〇〇〇	火力	七五
同 同	京阪電氣鐵道	二五〇	火力	五〇

電話 本年四月末ノ電話加入數ハ全國ヲ通シテ普通及特設ト
モ合計十萬九千七百八十二口ニシテ此經費二千五百七十九萬
九千四百八十四圓、内未設四萬六千八百八十三口ナルガ去明
治二十三年十二月初メテ我國ニ電氣事業ノ實行サレテ二十年
間各年次發達ノ跡ヲ示セバ左ノ如シ

架設數	架設數
二十三年 三四三	二十四年 八二一
二十五年 一、五〇四	二十六年 二、六七二
二十七年 二、八四三	二十八年 二、八五八
二十九年 一、三〇〇	三十年 三、五〇〇
三十一年 三、〇四三	三十二年 四、五五五
三十三年 六、八八〇	三十四年 四、八一七

三十五年	六、一五一	三十六年	一
三十七年	七八五	三十八年	五八五
三十九年	一一、〇二六	四十年	一七、二八〇
四十一年	二一、三〇九	四十二年	一七、五一〇
四十三年	一三、〇〇〇		

●大阪市營電鐵成績 大阪市營電氣鐵道ノ乗車
賃ハ、現今區間制ニシテ全線ヲ五區ニ別チ、一

實 收 入

區二錢ヲ徵收セルガ、區間制ノ非難多キ今日、
植村新市長ハ三錢均一制施行ノ案ヲ立テ、之ガ
施行ノ計畫ヲ立ツルヤ、是非ノ議論頗ル囂然タ
リ。今研究者參考ノタメ、同鐵道一日平均營業
成績統計表ヲ掲グベシ。
自明治四十二年四月一日
至明治四十三年七月三十一日

開通箇所	天王寺公園前迄	端藏橋迄中途ニ	中之島線全部	玉造線上本町二丁目
統計期間	自四十二年四月一日 至同年六月三十日	自四十二年七月一日 至同年十二月三十一日	自四十三年一月一日 至同年二月二十八日	自四十三年三月一日 至同年七月三十一日
種別	實收入金額	實收入金額	實收入金額	實收入金額
百分率	百分率	百分率	百分率	百分率
(圓數券)	一、六八七、〇〇〇 ^円	一八、九五三、〇〇〇 ^円	二一、八〇〇、〇〇〇 ^円	二七、六二九、〇〇〇 ^円
(普通券)	四八三	五二六	五五四	五八三
一 區	二六九、九〇〇	八三	三五、一六〇	四〇、一八七五
二 區	六〇五、〇〇〇	一七四	六一、四八〇	一六二
三 區	五八七、八〇〇	一七〇	五三、二四〇	一三七
四 區	一三三、五〇〇	三九	一〇、八一〇	二九
五 區	三六四、〇〇〇	一一	二、八九〇	八

乘客人員其他各種計算

計	減	券	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區	區
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

第九卷 (六九三)

雜錄 雜報

第四號

一五五

營業哩數(複線)	一	二	三	四	五	計	同上ニ對スル金額
複線一哩ノ乘客平均數	減	區	區	區	區		一人平均賃金
(半券)	區	區	區	區	區		一人平均乘車區間
							營業哩數(複線)
							複線一哩ノ乘客平均數
							回數
							總收入
							一人平均乘車區間豫定
							一人平均賃金豫定
							營業哩數(複線)
							複線一哩ノ乘客平均數

推定計算

[illegible]

豫定乗客合計	六二五七	一、一〇一	一	八、一〇〇	一	一〇、〇三二
總計乗客數	一一〇七五	一一、一八〇	一	一三、四一一	一	一六、六八元
一哩平均乗客數	一一、五七七	一一、〇〇九	一	一三、六五五	一	一六、六八元
一人平均賃金	三二五	三〇六	一	二九〇	一	二八八

備考 明治四十二年四月一日惠美須町天王寺公園前開通、同年十一月一日渡邊橋船津橋間開通、同年十二月二十一日船津橋二番道路間開通、同日天王寺公園前天王寺西門前間開通、明治四十三年三月一日末吉橋上本町二丁目間開通、明治四十一年度以前ハ略之

●倫敦ニ於ケル國際法協會 去八月一日ノ年次大會ニ於テジャスチス、ケネデー氏ハ海法ノ國際的統一ニ關スル論文ヲ朗讀シ、若シ各國ノ海法ヲ共通ナラシメバ船主、保險者、銀行家及商人ノ利便甚大ナルベキヲ説明シ、アーサー、コーヘン及サー、ジョン、マクドネル氏ハ倫敦ノ宣言ニ關シ意見ヲ陳述シ、次デサー、ジョン、グレー、ヒル氏ハ勞働者傷害賠償制度ニ關スル各國法規ヲ論述シタリ、猶ルイ、フランク氏ハ勞働者傷害賠償法ガ船主ノ責任ニ及ボス結果ニ付述ブル所アリ。

ゼ、イー、アル、スチーヴンス氏ハ船主ノ責任

問題ヲ論ジテ曰ク、船主ハ船荷證券ニヨリ無條件ニ運賃ヲ取得シナガラ、一方ニ殆ンド總ベテノ責任ニ對シテ免除サルベキ旨ヲ掲ゲラレリ苟クモ政府ガ鐵道ニ付キテ干涉スル以上ハ船主ニ對シテモ制限ヲ付スベキ理ナリ米國ノ如キハ現ニ「ハーター」條例ナルモノアリ、英國船モ米國ニ航海スル場合ハ此ノ條例ノ下ニ適法ノ注意ヲ加ヘラレリ、船主ガ其使用人ノ商業上ノ過失ニ對シ責任ヲ負フハ一見酷ニ失スルガ如キモ決シテ他ノ一般ノ雇主ニ比シテ重キニ過グルモノト云フ能ハザルベシ、商人ハ一旦其貨物ヲ船主ニ託シタル以上ハ之レニ對シテ保護ノ道絶フルモ

ノナレバ船主ハ其引受ケニ係ル運送品ノ損害ニ關シ使用人ノ過失ニ向テ責任ヲ負フベキハ當然ナルベシ云々、ワルトン判事ハ海上契約ニ關スル國家干涉權ノ範圍ト題スル講演ヲ爲シ、海上契約ハ殊ニ複雑ヲ極メ變動常ナキモノニシテ之レニ對スル國家ノ干涉ハ絶對的ニ非ナリ、ト出張シ、サー、ジョン、グレー、ヒル氏ハ之レニ贊成シテ、若シ現在以上ノ責任ヲ船主ニ負擔セシメバ其ノ報酬ヲ増加セザルベカラズ、即チ運送契約書ニ於テ除外セル或種ノ損害ヲ船主ニ負擔セシメバ船主ハ之ヲ保險ニ付スル爲メニ保險料ヲ要スベク從テ一方ニ運賃ノ増拂ヲ請求スベシト、ロード、チーフ、ヂヤスチスモ同意見ヲ表ハシ、本問題ハ結極船主ト荷主ト何レカ危險ヲ負擔スベキニ歸スベキモノニシテ其責任ノ歸スル所サヘ明ナラバ夫レニテ可ナリ若シ船主ノ負擔ナラバ船主ガ保險者ニ依頼スベク荷主ノ責任ナラバ荷主ガ保險ヲ付スベシ、本問題ハ毫モ公

安ニ關係無ケレバ、國家ノ干涉スル價值ナシ云々、

●英國雇士責任保險一九〇九年成績 同年度ニ

於ケル保險料收入ハ著シク膨脹セルモ利益ノ割合ハ比較的小ナリ、今十二會社(何レモ火災生命等ノ附屬事業トシテ雇主責任保險ヲ營メリ)ノ

合計成績ヲ見ルニ

純保險料	六八三、四一一磅	損失辦金	三八九、八二三磅
口 錢	九一、九七五磅	營業費	一四七、九〇五磅
純 益	五三、七三八磅		

●英國天候保險 天候保險ハ英國ニテ創始セラレタル奇異ナル保險ノ一ナルガ近時其利用甚ダ盛ンニ行ハレ、殊ニ遊獵者旅行者等ノ間ニ好評ヲ博シツ、アリ。此保險ノ期間ハ大抵一週間ニシテ被保險者ハ一定ノ保險料ヲ支拂フトキハ其週間内ニ暴風雨天等天候ノ險惡ナル爲メニ外出シ得ザル日アラバ、一日ニ付幾何ト豫メ定メタル保險金ヲ受クル仕組ナリ。

●米國ニ於ケル貯蓄ト生命保險 米國民ノ貯蓄

銀行預金高ト生命保險契約高トハ共ニ過去十數年間ニ著シキ増加ヲ來セルガ、就中生命保險契約高増加ノ割合ハ遙カニ貯蓄銀行預金高増加ノ割合ヲ凌駕セリ。今少シク計數ヲ以テ此趨勢ヲ示サンニ一八八九年一月一日ニ於テハ、貯蓄銀行預金十三億六千四百十九萬六千五百五十弗ニ對シ、生命保險會社ノ法定準備金ハ六億六千八百十九萬六千八百八十三弗ニ過ギザリシニ、千九百四年此後五ク年間ハ貯蓄銀行ノ預金高ノ増加七億二千五百三十四萬九千百弗即チ二割四分七厘一毛ニ對シ保險會社ノ準備金ノ増加ハ十一億千五百七萬二千八百九十七弗即チ四割九分二厘三毛ノ割合ヲ示セリ。以テ米國民ノ生命保險利用ノ發達ノ度ヲ察スルヲ得ベシ。

●米國新鐵道法 同法ニ依レバ大統領ハ鐵道會社ノ株式及社債ノ發行ニ關シ調査委員會ヲ任命スル事ヲ得ベク、又五人ノ裁判官ヨリ成立スル商事裁判ヲ創設ス、商事裁判所ハ洲際商業

委員ノ判決ニ對シテ效力ヲ有セシメ又ハ之ヲ無効トスルノ權能アリ、又此ノ新鐵道法ニヨレ

ハ委員ハ鐵道賃率ノ相當ナルヤ否ヤヲ調査スルノ職權アリ、委員ノ請求アラハ鐵道會社ハ賃率引上ゲノ(若シ引上ゲタル場合ハ)正當ナルヲ證明スルノ義務アリ、正當ナル積荷ノ等級ヲ編成スベキコト、賃率、運送證券ノ發行等ニ關スル規程、慣習等ヲ妄リニセザルコト等ニ對スル政府ノ強制權ハ舊法ト異ナルコト無シ。

●國債整理ノ經過及將來 國債整理經過ニ付キ當局者ニ質シテ得タル處ナリトテ、去月下旬通信社ノ報ズル所ニヨレバ大體ノ計算左ノ如シトナリ。

本年度ノ償還ト繰越整理資金

今先ヅ本年度ニ於ケル國債償還ノ概要ヲ説明スレバ、本年度整理資金ハ左ノ如シ。

第一回四分利(二月募集)現金應募
前年度整理基金繰越高

100,000,000 円
10,000,000

四十三年度豫算計上資金
第二回四分利(四月募集)現金應募

合 計 一五、〇〇〇、〇〇〇
二五、八〇〇、〇〇〇

ニシテ、外ニ巴里募集佛貨公債及倫敦募集ノ内、裏書公債償還殘金アリ。

佛貨公債純手取金額 一五、〇〇〇、〇〇〇

英貨四分利純手取金中裏書公債 三、〇〇〇、〇〇〇
九千三百萬圓償還殘餘 二五、七〇〇、〇〇〇

合 計

二口合計 二五、七〇〇、〇〇〇

右二億八千五百七十萬圓ヲ以テ既ニ償還セル公債ハ左ノ如シ

海軍及整理公債償還 五、〇〇〇、〇〇〇

内乗替ノ爲メ不用額 一〇、〇〇〇、〇〇〇

整理公債償還 八、〇〇〇、〇〇〇

軍事公債償還 五、〇〇〇、〇〇〇

小 計 一四、〇〇〇、〇〇〇

内乗替ノ爲メ不用額 五、〇〇〇、〇〇〇

合計 一八、〇〇〇、〇〇〇

現金償還 一八、〇〇〇、〇〇〇

乗替不用額 七、〇〇〇、〇〇〇

即チ今日迄ノ結果ニ依レバ、整理資金ノ内現金

償還ハ、一億千六百萬圓(此内ニモ今後乗替アラシ)ニシテ、

差引殘餘金 一六、七〇〇、〇〇〇

ナリ。内本年中心償還スベキモノ、

帝國五分利公債(本月末) 五、〇〇〇、〇〇〇

第二回及煙草國庫債券(未定) 三、〇〇〇、〇〇〇

合 計 八、〇〇〇、〇〇〇

而シテ帝國五分利ニ於テモ、約千五百萬圓第二回國庫債券ニ於テモ約一千萬ノ乗替不用ヲ生ズベクレバ之ヲ加算セル、

明年度繰越整理資金ハ 一四、七〇〇、〇〇〇 円

ニ上ルベシト豫測サル。

四十四年度ノ整理資金償還高

明年度ニ於テ、政府ガ償還資金トシテ計上スル金額ハ、必ズヤ六千萬乃至七千萬ニ上ルベクレバ、整理基金ハ左ノ如クナルベシ。

前年度繰越整理資金 一四、七〇〇、〇〇〇

四十四年度豫算計上豫想 七、〇〇〇、〇〇〇

合 計 一八、〇〇〇、〇〇〇

而シテ、之ニ依ツテ償還スル事ニ決定セル國債ハ、

臨時事件公債未償還額

二九〇,五八〇

第三回國庫債券同上

五〇,四七〇

煙草專賣國庫債券同上

四六,五三〇

合計

三八七,五八〇

内預金部全部帝室日銀等所有

一〇〇,〇〇〇,〇〇〇

差引一般償還高

一四四,三三六〇〇

内一般乘替見込額

五七,六〇〇,〇〇〇

再差引現金償還

一七〇,二三八〇〇

ニシテ、前記一億八千萬圓ノ資金ヲ以テ、三四回ニ分割シテ償還セバ假令乘替高豫想ヨリモ少ナシトスルモ、整理ノ目的ヲ達スルヲ得ベシトナリ。

●佛國「クレディ・フランス」銀行法改正

don Economist ノ所報ニヨルニ、佛國ノ Credit Foncier ハ本年七月二日臨時總會ヲ開キ同銀行法改正案ヲ議ニ附シ、滿場一致ヲ以テ可決決定セ

リト云フ。今其改正案ニ據ルニ、從來預金額ハ總計一億法以下ノ制限ナリシヲ、一億二千五百萬法トナシ、次ニ資本金額ハ二億法、債券發行額ハ資本金額ノ二十倍ヲ超過スル能ハザルノ制度ナリシヲ、資本金額ヲ二億五千萬法ニ増加シ、而シテ資本増加ノ方法ハ臨時必要ニ應ジテ其手續ヲ爲スベキモノトシ、而シテ同行ハ條例ニヨリ少ナクトモ資本金ノ四分ノ一ヲ公債乃至國庫證券ニテ保有シ、他ノ四分ノ一ヲ出デザル範圍内ニ於テ營業用ノ土地建物、殖民地及被保護國ヘノ貸附、若クハ佛蘭西銀行ガ貸附擔保品トスル證券ニ對スル貸附ヲ爲シ、其他ノ資金ハ不動產擔保貸附、公共團體ヘノ貸附若クハ佛蘭西銀行ガ保證準備トスル證券ノ種類ニ對スル貸附、若クハ少ナクトモ二人以上ノ署名ヲ有シ而シテ銀行ノ欲スル裏書アル商業手形ニ對スル貸附ヲ爲スベシト規定セリ。

●**國立銀行ノ新設** 本年六月中、米國ニ於ケル國立銀行新設ノ願出ハ三十四ニ及ビシガ、其中二十六行ハ許可セラレ三行ハ却下セラレタリ。同月營業開始ヲ許サレタルモノハ四十行、其資本二百六十四萬弗ニ達セリ。又同國ニ於テ組織セラレタル國立銀行數ハ九八〇三ニシテ、其中廢業セルモノ二六三三行、現存スルモノ七一七〇行ニ及ビ、其現在資本ハ十億弗餘ナリ。國立銀行ノ紙幣流通額ハ七億一千三百萬餘弗ニシテ、中二千七百九十萬弗ハ清算又ハ支拂停止ノ銀行及組合銀行ノ爲メニ、財務官ニ供託セラレタル法貨額ニ相當ス。

●**資本額ト債務トノ割合** 近來銀行信用ノ發達益著シク、昔ノ信用標準ニテハ、到底斯クマデハ進歩セザリシナルベシ。此傾向ニ對シテバルグレーブ氏ハ、英國銀行ニ就テ曰ク、「銀行負債ハ資本ノ三倍以上タルベカラズトイフ、昔ヨリノ掟ヲ何人モ想起スル所ナランモ、今日尙ホ之

ヲ固守スルコト能ハズ。尤モ現今一般ニ見ル負債ノ資本ニ、七倍スルガ如キノ可否ハ別問題ナリ」ト、此傾向ハ北米合衆國ニ於テモ存セリ。

●**丁抹國立銀行營業成績** 同銀行ハ七月三十一日ノ營業年度末ニ於ケル、報告書ヲ發表セルガ同年度ニ於ケル利益ハ、二三七九、六六〇「クローネ」ニシテ、前年度ハ二、七六一、二四八「クローネ」ナルヲ以テ、約二萬一千磅ノ減少ヲ示セリ。爲メニ同株ハ二日間ニ四分ノ下落ヲ見タリ。全利益中七五〇、〇〇〇「クローネ」ハ、先ヅ國庫ニ入り、残りハ一、六二九、六六〇「クローネ」即チ株金二七、〇〇〇、〇〇〇「クローネ」ノ六分ニ當ル。而シテ配當平均準備金ハ、既ニ一、二四三、四八八「クローネ」ニ達スルモ、之ヲ支出スルノ必要如何ハ未決問題ナリ。又流通紙幣ハ一二五、六〇五、四六五「クローネ」ニ上リ、銀行ノ所有セルモノハ、一一、三九四、五三三「クローネ」ニ及ブ。